ミルク

亜蘭澄椎

泳ぐのは好きだ。水泳部に入る程に好きな訳ではないけれど、暑い夏の日差しの下で、カルキ臭いプールの水に浸かって身体を冷やしつつ、水に浮かぶ浮遊感を楽しみながら身体を動かすのは、気分が良い。

僕が住んでいる町では、公立の小学校のプールを、夏休みに一般人達に開放する。ほんの三十円の保険料で、一日中泳ぎ放題となるので、僕みたいな泳ぐのが好きな町民は、泳ぎ放題の夏休みを過ごす事が出来るのである。

高校生になった年の夏休みも、僕は一般に開放されている小学校……数年前まで、僕自身が生徒として通っていた小学校のプールに、泳ぎに通っている。無論、遊びやバイトの予定が入っていない日だけだが。

例年通り、僕はプールでの泳ぎを楽しんでいた。でも、今年の僕には泳ぐ事以外に、もう一つ別の楽しみがあった……。

笛の音が鳴り響く。大学生のアルバイトらしき監視員の青年が、休憩時間を知らせる為に吹いた笛だ。

「休憩時間でーす！　プールから上がって、身体を休めて下さい！」

監視員の声が、波打つ水面に木霊する。このプールでは一時間の内十分間、休憩時間を取る決まりになっている。休憩時間の間、泳ぎに来た人達はプールサイドで、思い思いに身体を休めるのである。

プールに通っている常連とでもいうべき人達は、大体、身体を休める場所が決まっている。僕が休憩時間に休む場所も、殆どの場合、プールの隅にあるコンクリート製の壁の前に決まっていた。

基本的に、プールの周りを囲んでいるのはネット状のフェンスなのだが、一部だけ煤けた色合いのコンクリートの壁になっているのである。

日の光に暖められた、コンクリートの壁に寄りかかりながら、身を休めるのは気分が良い。その事が、僕が休憩時間を過ごす場所として、壁の前を選んだ理由だ。

温いとはいえ、プールの水温で冷やされた体を温めるには、コンクリート壁の前は、ベストの場所といえる。そして、そのベストの場所に目を着けていたのは、僕だけでは無かった。
プールから上がったばかりの濡れた水着姿の女性が、僕の目の前に現れる。年の頃は三十過ぎくらいだろう、人目を惹く豊かな胸が印象的な、艶かしい女の人である。
名前は、多恵（たえ）というらしい。別に知人という訳では無い。彼女の母親らしき六十歳位の小母さんが、多恵と呼び捨てにしていたのを、何度か耳にした事があるだけなのだ。
彼女は、家族とプールに通っていた。母親らしき女性と、娘らしい乳飲み子の三人で。僕以外に、このベストの場所に目を着けていたのは、この家族連れだった。
母親らしき女性から、彼女……多恵さんは、娘なのだろう乳飲み子を手渡される。休憩時間が終わると、今度は多恵さんの母親らしき女性の方が泳ぎに行く。二人は休憩時間に入れ替わりつつ、交互に乳飲み子の面倒を見ているのである。
休憩時間、彼女達の近くで身体を休める事になったのは単なる偶然。最初の頃は、特に気にもとめていない存在だったのだが、数日前から彼女達……より正確に言えば多恵さんは、僕にとって、気になる存在となっていた。
気になる原因は、休憩時間に多恵さんが行う事がある、ある行為である。乳飲み子である娘に乳をねだられた多恵さんは、人目を気にする様子も無く、プールサイドで堂々と片肌を脱ぎ、乳を与え始めるのだ。
母親になると、人前で授乳する事は、それ程恥ずかしい行為では無くなると、誰かに聞いた事があるし、行為自体に性的な意味合いは無い。無いのだけれど、おそらく三十は越えていそうな子持ちとはいえ、魅惑的な肢体の女性が胸を肌蹴ている光景は、刺激的である。
僕は盗み見したいという欲望を抑えられず、何度も彼女が授乳する光景を、盗み見してしまっていた。泳ぐ為にプールに通っていた筈なのだが、今では既に、プールに通う理由の三割程は、

授乳シーンを覗き見る為になってしまっていたのだ。
今日も、三メートルも離れていない場所で、多恵さんは胸を肌蹴て、娘に授乳を始めた。豊かで……柔らかそうな乳房の先端を、涎に濡れている娘の唇にあてがう。
口元から、少しだけ白っぽい液体を零しながら、娘は口と喉を動かし、多恵さんの乳を吸う。性的な意味合いなど無い、微笑ましい母娘の光景なのだが、僕は目に焼けていない、普段は水着に隠されている、肌色の乳房を盗み見て、胸を時めかせてしまう。
数分で、授乳は終わる。唾液と母乳の混ざる、白濁した液体に濡れる乳首から、娘が唇を離すと、多恵さんは肌蹴ていた胸を水着の中にしまう。
魅惑的な女性の胸を、僕が盗み見る時間は、終わったのだ。乳房を見れる時間が終わった事を、少し残念に思っていた僕の耳に、監視員の笛の音が届く。休憩時間が終わったのである。
少しだけ、硬く……大きくなっているだろう股間の状態に気付かれぬ様に、僕は腰を少しだけ引きながら、そそくさとプールサイドを移動し、プールに入る。夏の日差しと興奮で、火照っている身体を冷やすには、プールの水温は程好い。
今日も多恵さんの授乳シーンを見れた満足感を味わいながら、僕は泳ぎと休憩を繰り返した。日が傾き、家路につくまで……。

家に帰る道すがら、腹が減ったので、何か食べる物でも買おうと思い、僕はコンビニに立ち寄った。すると、僕は聞き慣れた声に呼び止められた。女子高生にしては低い声の持ち主である、姉の瀬理（せり）の声である。
「瀬南（せな）じゃない！　あんたもプールの帰り？」
高校指定の白い体操着姿にスポーツバッグという、飾り気というものから程遠い感じのスポーツ少女である瀬理は、僕と同じ高校の、一つ年上の先輩でもある。水泳部のホープの瀬理は、夏休み中は殆ど部活動の為、高校のプールに通い詰めている。
瀬南の問いに、僕は頷く。

「そうだよ。泳ぎ疲れて腹減っちゃって、何か食いながら帰ろうかなーと思ってね」
「泳ぎ疲れてって、どうせ水遊びしてただけのクセに！」
「酷いな、姉ちゃん程にマジで泳いでる訳じゃないけど、一応、一日トータルで五百メートルくらい泳いだんだぜ」
この数字に嘘は無い。僕は一応、二十五メートルプールをトータルで二十往復以上はしているのだ。
「少ないよ、一日で五百メートルじゃあ。最低、二千は泳がないと」
「姉ちゃんの基準で判定すんなって。水泳部以外の人間からしたら、五百メートルって相当に泳いでる方なんだから」
「そうかなぁ？」
「そうだよ……で、姉ちゃんは？」
「あたしも練習で腹が減ったから、買い食いでもしていこうかなーと。あんたと同じよ」
僕と姉は軽口を叩きあいながら、コンビニの商品棚から好みの食べ物を物色すると、会計を済ませてコンビニを後にする。オレンジ色に染まる、夕食の買い物で賑わう商店街を、僕と姉は並んで歩き出す。
コンビニで買った菓子パンを食べながら、僕と瀬理は夕暮れの中、家に向かって歩いて行く。思春期の姉弟は、仲が良くないのが普通なのだろうが、僕と瀬理は仲が良い。高校への登下校を、共にする事が多いくらいに。
仲が良すぎるせいで、僕は良く友人達にシスコン呼ばわりされる。僕に恋人と呼べる程の存在が出来た事が無いのは、友人達によれば、僕がシスコンだからなのだそうだ。
瀬理の方も僕と似たような状況のようで、恋人が出来ないのを、友人達にはブラコンのせいだと、決め付けられているらしい。そんな風な話を、姉の女友達から、何度も聞いた事がある。
幼い頃、父親の不倫が原因で両親が離婚し、僕と瀬理は母親に引き取られ、育てられてきた。瀬理が中学に上がる前まで、母は仕事で忙しく、家では僕と瀬理だけで過ごす事が多かった

せいで、僕と瀬理の関係……親しさは、普通の姉弟よりも、かなり濃密なものなのだ。無論、あくまで姉弟としてのラインを、踏み越えない範囲での話なのだが……。

翌日も、特に予定は入っていなかった為、僕は小学校のプールに泳ぎに行った。空に浮かぶ城の様な入道雲を眺めながら、背泳ぎでゆっくりと泳ぎ、僕は昨日同様、まったりとプールを楽しんでいた。ただし、今日は一つだけ、昨日とは状況が違っていた。

プールから上がったばかりの濡れた水着姿の多恵さんが、僕の前を通り過ぎる。多恵さんは、何時もの場所……僕から少し離れたコンクリート製の壁の前に座る。しかし、多恵さんの周りに、今日は誰もいない。

つまり、昨日と違うのは、多恵さんが一人でプールに来ている事なのである。一人で来ている……つまり、乳飲み子や母親を連れていないのだ。

（――って事は、アレ見れないんだ）

僕は気落ちしたように、心の中で呟きながら、嘆息する。無論、アレとは多恵さんの授乳シーンである。

「――溜息なんかついて、何か嫌な事でもあったの？」

突如、優しげな口調で声をかけられ、僕は驚く。声は、聞き慣れた多恵さんの声だ。聞き慣れたと言っても、盗み聞きで聞き慣れただけなのだが。

声のした方……多恵さんのいる右側に目をやると、多恵さんが僕の方を見ていた。間違い無い、多恵さんは僕に声をかけてきたのである。

そのまま、多恵さんは膝立ちで移動し、僕の右隣に座った。殆ど、肌が触れ合いそうな近さの場所に……。

「隣り、座って良いよね？」

「――もう座ってるじゃないですか」

「まぁ、そうなんだけど」

多恵さんは気さくな口調で、僕に話しかけてくる。

「何時も楽しそうにしてるのに、今日は珍しく溜息なんかついてたから、気になって声かけてみたんだけど」
「あ、いや……別に何でも無いです」
僕の事を、多恵さんが気にしてくれていたと知り、嬉しく思いながらも、多恵さんの授乳シーンが見れないのが残念だなとどは、口が裂けても言えないので、僕は話を誤魔化す事にした。
「今日は珍しく、お一人で来てるんですね」
「――一緒に来てた母さんが、プールに少し飽きたみたいなの。孫の面倒はみておくから、今日は一人で行けって言われちゃって……」
盗み聞きしていた会話から察していた通り、多恵さんが一緒に来てたのは、多恵さんの娘と母親だったのだ。
「今日は娘が一緒じゃないから。君が楽しみにしてる、娘におっぱいあげてる姿は、見せてあげられないよ」
多恵さんの言葉を聞いて衝撃を受け、僕の全身が硬直する。きっと顔は青ざめている事だろう。
「いつも覗き見してたよね、私が娘におっぱいあげてるとこ」
「いや……あの……その……」
僕はしどろもどろになりながら、言い訳の言葉を頭の中から搾り出そうとする。そんな僕を見て、多恵さんは楽しそうに笑う。
「安心して、別に怒ってる訳じゃないから。そもそも、人目につくような場所でしてた時点で、あまり文句言う資格も無いだろうし」
多恵さんの言葉を聞いて、僕は胸を撫で下ろす。
「でも、覗き見してたって事は、興味あるんだよね？　私みたいなオバサンの胸なんかに」
悪戯っぽい口調と表情で、多恵さんは僕に問いかける。
「――女の人の胸とか興味あるの当たり前ですよ、男なんですから。それに……」
「それに？」
「母乳って飲んだ記憶無いから、どんな味するのかなーとか、

思ったりもして……。牛のミルクは味知ってるけど、人間のミルクの味なんて、赤ちゃんの時に飲んだっきりだから、味なんかとっくに忘れてるじゃないですか」
多恵さんの意図が読めなかった僕は、適当に言葉を返した。
「だったら、飲んでみる？」
「え？」
驚いた僕は、間抜けな声を上げてしまう。
「飲んでみるって……何を？」
上ずった声で、僕は多恵さんに聞き返す。
「――私のミルク」
意外すぎる多恵さんの言葉や反応に、僕は驚き、戸惑う。そんな僕の反応を楽しんでいるのだろうか、多恵さんは楽しそうな笑みを浮かべて、僕を見詰めている。
「今日は昼前に、家に戻ればいいんだ」
多恵さんはプールの時計に目線を移し、時間を確認する。時間は午前十一時数分前。
「飲んでみたいなら、ついて来て。外で待ってるから」
そう言うと、多恵さんは立ち上がり、シャワーの方に向かって歩き始める。崩れていない後姿を、僕に見せ付ける様に。
僕は慌てて立ち上がり、多恵さんの後を追う。僕の胸の鼓動は、泳いでいた時よりも速いリズムで、高鳴り始めていた。

シャワーを浴びた後、急いで着替えた僕は、プールの出入り口の近くにある自転車置き場の前で、多恵さんを待っていた。外で待っていると多恵さんは言っていたが、女の人の方が着替えなどには時間がかかる。ほぼ同時に更衣室に入ったのだから、僕の方が待つ事になるのは、当たり前といえば当たり前なのだ。
自転車置き場で待ち始めてから五分後、多恵さんはプールの出入り口から出てきた。辺りを見回して僕の姿を確認すると、多恵さんは僕の方に早足で歩いて来た。
「御免ね、待たせちゃったかな？」
僕に謝罪の言葉をかける、シンプルな黒のキャミソールに、

ジーンズという出で立ちの多恵さんは、子持ちに見えない程に若々しく見える。水着同様のホルターネックスタイル。おそらく多恵さん好みの、デザインなのだろう。
キャミソールの胸の辺りには、二つの突起が浮き出ている。
「どうせすぐに外すから、着けて来なかったの」
多恵さんが言う所の着けて来なかったものとは、無論ブラである。キャミソールの布地に浮き出た乳首に、僕が目を遣っていた事に、気付いた上での言葉なのだろう。
「じゃあ、何処か適当な場所探そうか。赤ちゃんに母親がおっぱいあげるならともかく、思春期の男の子相手におっぱいあげるの、人に見られるの困るから」
僕は多恵さんの言葉に、頷いた。
「何処か思い当たる所……ある？」
多恵さんに問われた僕の頭に、体育倉庫が思い浮かぶ。プールに来る途中に目にした、小学校の体育倉庫が。
「体育倉庫とか、どうかな？」
「――体育倉庫か。人目につかなそうで良いけど、夏休みだから、鍵がかかってるんじゃない？」
「プールに来る途中、体育倉庫の前通ったんだけど、ドアが少し開いてたんだ。多分、夏休み入る前に、鍵かけ忘れたんだと思う」
「それなら、体育倉庫でいいかな。案内してよ」
場所を決め終えた僕達は、自転車置き場を後にして、体育倉庫へと向かった。

体育倉庫は、体育館の隣りにある。夏休みである今、辺りに殆ど人はいない。蝉の鳴き声と僕達の足音だけが、辺りに響いている。
程なく、僕達は体育倉庫に辿り着いた。来る途中に目にした通り、ドアは開いている。これで中に人がいなければ、この体育倉庫を利用して、僕は目的を果たす事が出来る。
僕は中に誰もいませんようにと心の中で祈りつつ、開け放た

れたままのドアから、体育倉庫の中を覗き込む。
「――誰か、いますか？」
体育倉庫の中に人の姿は見当たらないし、返事も返って来ない。体育倉庫の中が無人だった事に安堵しながら、僕は体育倉庫の中に足を踏み入れる。多恵さんも僕の後に続いて中に入りつつ、ドアを閉めて施錠する。
窓やドアが開いていたせいだろう、倉庫の中の空気は淀んではいない。
「あそこが良さそうね」
多恵さんはマット運動用のマットを指差すと、指差した方に向かって歩いていく。僕は多恵さんの後を追う。
多少、ホコリが積もっているのが気になったのだろう、多恵さんはパンパンとマットを叩いてホコリを払ってから、その上に腰掛ける。安っぽいベッドを思わせるマットの上に、艶っぽい大人の……しかも、これから胸を吸わせてくれるという女性が腰掛けている光景は、僕の胸をときめかせる。
「隣りに座って」
僕は頷き、多恵さんの左隣りに腰掛ける。
「あの……本当に良いんですか？」
「当たり前じゃない。良くなかったら、ついて来ないよ、こんな所まで」
「でも……」
多恵さんの左手の薬指に光る銀色の指輪に、僕は目線を移す。多恵さんが人妻であるという証拠であるだろう、指輪に。
「ああ、これね。気にしなくていいよ」
「子供もいるし、結婚してるんですよね？」
「今……実家に娘と戻って来てるの。原因は……私が妊娠してた時、ダンナが浮気した事」
「――離婚するんですか？」
「まだ決めてないけど、そうなるかもね」
平然とした口調で、多恵さんは続ける。
「ダンナは他の女としてるんだから、私が他の男と何かしたっ

て、文句言われる筋合いは無いって訳。だから、遠慮しないで」
僕は、多恵さんの言葉に頷いた。要はお互い様という事なのだろう。
「緊張してるみたいだね。こういう事するの初めて？」
からかい半分、楽しさ半分といった感じの口調で、多恵さんは僕に問いかける。僕は見栄を張らずに、頷く。
「そう……じゃあ、飲ませてあげる、私のミルク」
そう言うと、多恵さんは肩紐を肩から外して、キャミソールをずり下げ、豊かな胸を露にする。

（続く）

※　体験版は、ここまでです。続きは製品版の「ミルク色の夏休み」を御購入の上、お楽しみ下さい。

※　この体験版は、「ミルク色の夏休み」製品版に収録されている選択肢付き小説の冒頭部分を収録したものです。ちなみに、「ミルク色の夏休み」は全体で百三十枚程度、体験版は冒頭二十枚程を、収録しています（枚数は、いずれも四百字詰め原稿用紙換算）。